

健全な種いも生産のポイント

1 健全ほ場の確保

健全な種いもを確保するには、病害感染のリスクが低いほ場を選定し「種いも専用ほ場」を準備して栽培する。

★ 種いも専用ほ場の条件

(1) 前年に水稻を栽培(湛水)した乾田

～明きよ, 耕盤破碎等の排水対策を行う～

(2) さつまいもを数年栽培していないほ場

(3) 前作で基腐病等の発生が少なく, 排水良好なほ場

～殺菌効果のある剤(クロルピクリン, ダゾメット等)で必ず土壤消毒を行い, また, 被覆を実施すること～



※ 種いも生産を水田で実施した現地事例(R1)

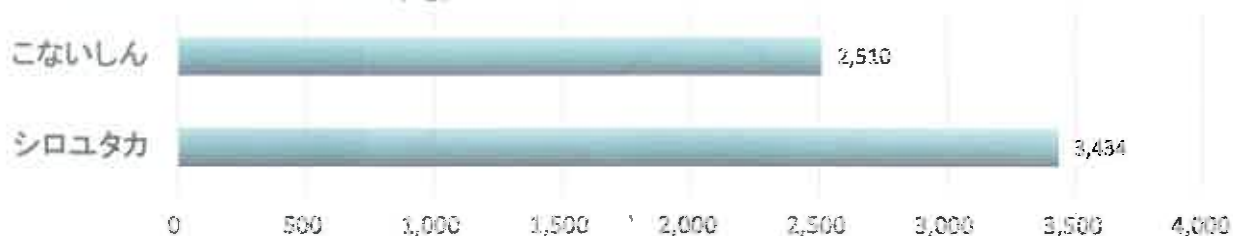
実証ほの概要

- 設置場所: 南九州市川辺 水田
- 品 種: シロユタカ, こないしん
- 定 植 日: 5月26日(苗消毒実施)
- 収 穫 日: 10月14日

実証結果(1年目)

今回の実証により, 水田跡でさつまいもを栽培しても一定の収量を得られることがわかった。

試験区の10aあたり収量(kg)



※こないしんは通常(畑)栽培ではシロユタカと同等以上の収量が得られます。

2 健全苗(植付用苗)の確保

(1) 植付用苗の調達

- ・ 茎頂培養(バイオ)苗から増殖した苗を使用して種いもを生産する。
- ・ バイオ苗の導入(購入)が困難な場合、「病害が発生していない種いも生産ほ場」由来の“健全種いも”の苗を使う。
- ・ 使用する種いもは、伏せ込む前までに必ず種いも消毒を行い、加えて育苗床の消毒も必ず実施する。

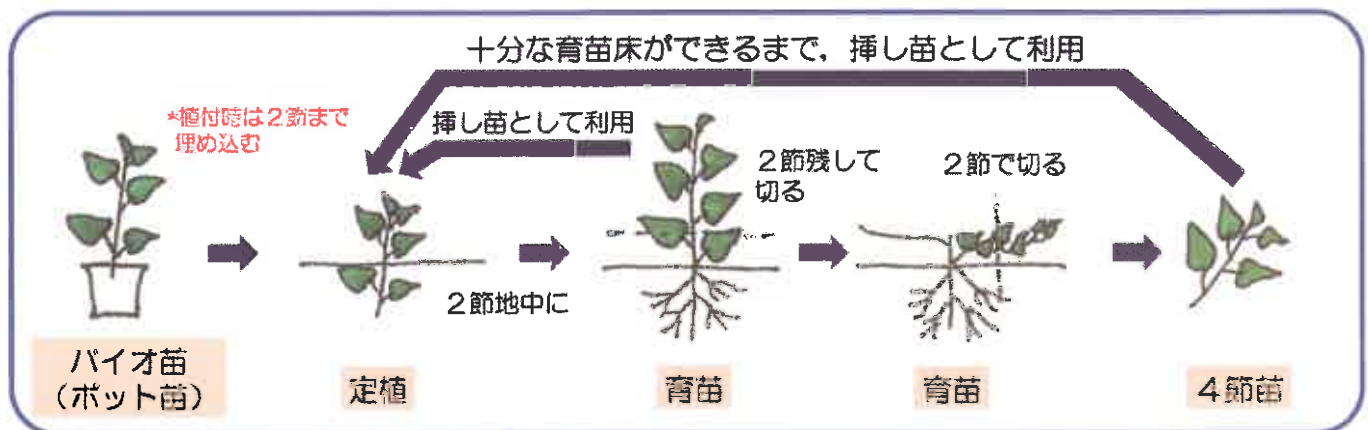


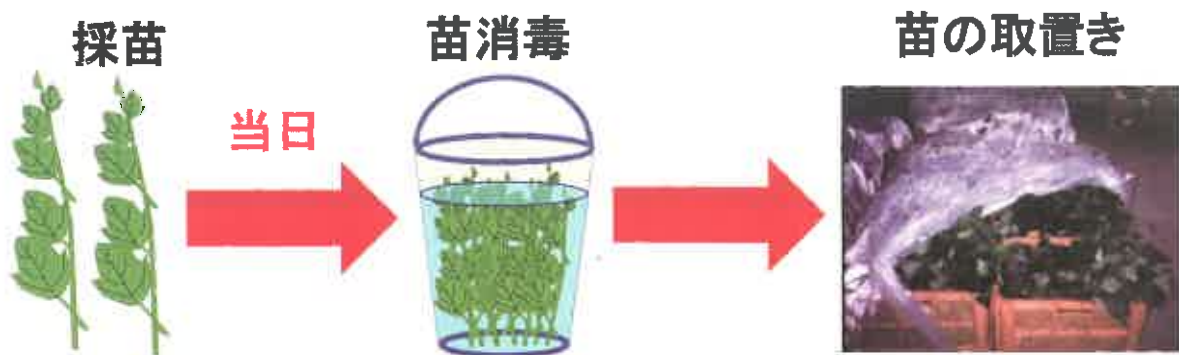
図1：バイオ苗の挿し苗増殖方法

(2) 採苗方法

- ・ 採苗は、黒斑病や基腐病からの感染リスクを低下させるために、地際部から5cm(2～3節)以上の位置で行う。
- ・ 採苗に使用するハサミは、定期的にバーナー等で刃先を殺菌・消毒する。

(3) 植付苗の消毒

- ・ 採苗後は苗を速やかに消毒する。苗消毒は消毒液(ベンレート水和剤500倍希釈など)で約30分間、苗基部をしっかりと浸漬する ※図2参照
- ・ 消毒液は、使い回さず、使用日ごとに毎回作成する。



※苗を薬液に30分漬ける

図2：苗の消毒方法

3 「種いも」の発病リスク軽減方法

原則として「種いも」は、病気の発生していない「種いも専用ほ場」から採取する。

- ・やむを得ず、基腐病の発生ほ場から種いもを採取しなければならない場合は、種いもの株基部に基腐病の病徴(地際の茎の黒変)が出ていない株から(※図3)採取する。



図3: 利用株の判断

- ・採取した種いもは貯蔵前に下の3つの処理を行うことで、貯蔵中の発病リスクを軽減させることができる。

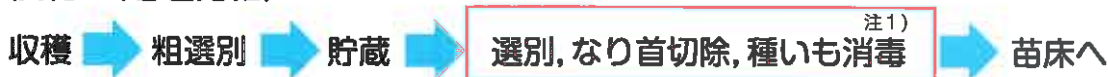
- ① 流水で水洗・選別 ② なり首と尾部の除去 ③ 種いもの消毒

○健全な種いもを確保する管理方法

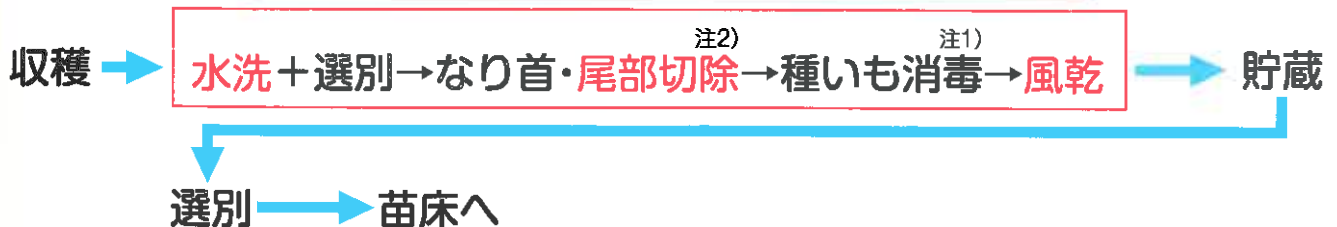


図4: 保管のための切除部位

● 慣行の処理方法



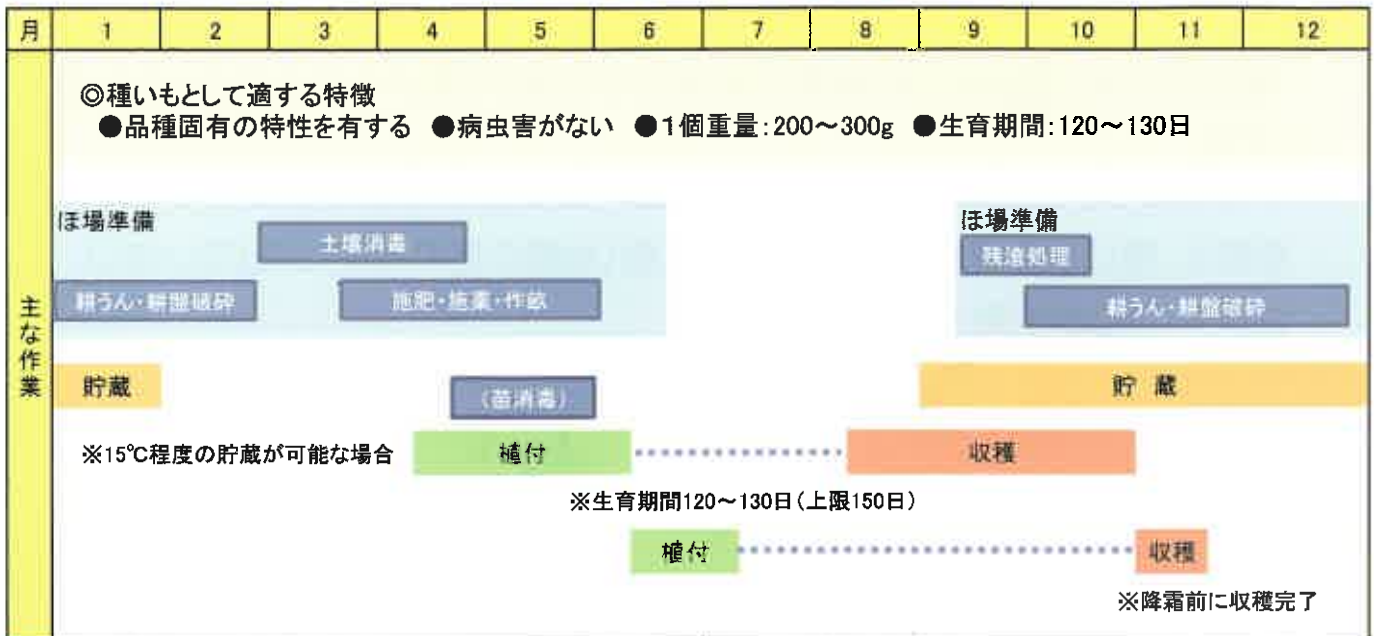
これからは「貯蔵前処理」の工程を行なう



注1) 黒斑病対策としてトップジンM水和剤200倍液に30分間浸漬(塊根切除後、速やかに実施)し、濡れた塊根による貯蔵中の腐敗を避けるため、貯蔵前に十分風乾させる。

注2) 尾部の切除は、乾腐病等による貯蔵腐敗を予防するために実施する。

さつまいも種いも栽培暦



1 種いも生産専用ほ場の選定・確保

種いもは、病害感染リスクの低い専用ほ場で栽培する。

●苗専用ほ場の選定条件、準備

- ・前作での病害発生がなく、排水が良好であること。
- ・周辺ほ場から雨水等による病原菌流入の恐れがない。
- ・殺菌効果のある剤(クロールピクリン、バスアミド微粒剤)による土壌消毒が実施済みであること。
- ・感染リスクの低いほ場

例1 さつまいもを複数年栽培していないほ場

例2 前年に水稲栽培(湛水)した乾田(排水対策必須)

2 健全苗(植付用苗)の確保

(1) 健全苗の調達

- ・バイオ苗(ポット苗、挿し苗)由来の苗を使用すること。

(2) 育苗での注意点

- ・黒斑病や基腐病の感染リスク低下を目的としての取組
- ・地際部から5cm以上の位置で採苗する。
- ・採苗用ハサミをパーナー等により、定期的に刃先を殺菌消毒を行う。
- ・バイオ苗育苗と種いも育苗を並行して採苗する場合、ハサミはそれぞれ準備すること

(3) 植付用苗の消毒

- ・採苗後は、苗消毒を速やかに実施する。
- ・購入した挿し苗も、植付前に苗消毒を必ず実施する。
- ・苗消毒は、消毒液(ベンレート水和剤500倍希釈等)に約30分間、苗をしっかりと浸漬する。
- ・消毒液は、使い回さず使用日ごとに毎回作成すること。

○主な病虫害防除薬剤(植付前)

処理法	農薬名	病虫害名
土壌燻蒸	クロールピクリン	つる割病、紋羽病、基腐病
	バスアミド微粒剤	センチュウ、一年生雑草
	D-D(テロン)	センチュウ
土壌混和	ネマトリンエース粒剤	センチュウ
	ダントツ粒剤	コガネムシ
	プリンスベイト	コガネムシ、ハリガネムシ
苗消毒	ベンレート水和剤	つる割病、黒斑病、基腐病
	ベンレートT水和剤20	黒斑病、基腐病
種いも消毒	トップジンM水和剤	黒斑病

3 「種いも生産ほ場」の栽培管理

(1) 排水対策の徹底

- ・サブソイラ等による耕盤破碎の実施
- ・排水溝設置によるほ場外への表面排水処理の徹底(雨天後に排水確認、加えて改善による長時間滞水防止)

(2) 土壌害虫対策

- ・農薬散布によるセンチュウ類やコガネムシ類、ハリガネムシ類によるいもの加害防止

(3) 生育日数

- ・生育日数の目安: 120日~130日(上限150日以内)
- (若いいもは萌芽と苗立ちが優れるが、150日を超えると貯蔵性が低下する)

(4) 植付時期と収穫時期

- ・植付時期は、生育日数と収穫時期を考慮し決定すること。
- ・貯蔵庫(15°C程度で保管可能)が無い場合、気温が15°C程度となる時期(11月頃)に収穫する。
- (収穫後のいもは10°C以下で腐敗、16°C以上で萌芽、20~30°Cで黒斑病・軟腐病などが発生しやすい)

(5) 収穫時の注意点

- ・地際部の茎葉も含め確認し、株単位で腐敗や病害の無い、健全ないもを選別する。
- ・畑が良く乾いた晴天日に、種いもに傷(特に打ち傷)をつけないよう、丁寧に作業を行う。
- ・種いもの収穫は降霜前に必ず完了させる。

4 種いもの貯蔵管理

(1) キュアリング処理(室温30~33°C、湿度90~95%、4日間程度)は、種いもの傷の治癒による腐敗進行防止効果があり、可能な場合は、貯蔵前に実施する。

(2) 病害いもは、貯蔵前にしっかりと選別、除去する。

(3) 貯蔵に適した条件での保管

- ・貯蔵温度は、13°Cを基準に11~15°Cの範囲
- 貯蔵性が悪いコガネセンガン等は、14~15°Cを守る。
- ・湿度は、85~95%
- 湿度が低いと、いもの先端部のしおれ、腐敗の原因となる。
- ・二酸化炭素濃度は3%以下
- 種いもは収穫後も呼吸するため定期的な換気を実施する。